共栄会が、農耕隊を組織し、緑地を借用してさつま芋の生産を始めた（現代　三六）。戦局が悪化するなかで、当初の構想とは異なり、防空大緑地は農地として転用されていったのである。

このように、町制を施行した小金井では、都市化・工業化が進むなか、都市計画や防空大緑地などの事業が推進された。それらは戦時下ということを前提条件とした事業であったが、小金井の地域開発という要素も入り込んでいた。だが、戦争の長期化・末期化に伴って、戦争遂行のための要請が優先されるようになり、地域開発という構想は後景に退いていった。

## コラム　紀元二六〇〇年

昭和十五年は神武天皇の即位から二六〇〇年目にあたるとされ、多くの行事が紀元二六〇〇年の記念・奉祝と関連付けられ、国を挙げての一大イベントとなった。先述した防空大緑地の造成もこの記念事業となった。

昭和十五年の元旦、桜町病院では聖堂の鐘を合図に黙祷が行われた（『聖ヨハネ会五十年誌』一四九頁）。桜町病院はカトリック司祭の戸塚文卿が昭和十四年に開設した病院で、以前からあった病院と結核療養所を母体としていた。このうち結核療養所は、日中戦争突入後に戸塚が結核撲滅の必要性を訴えて作られたものだった（現代　一〇）。三月には、記念事業として北京の万寿山に桜の名木二六〇〇本を植え付ける計画のため、小金井堤産の山桜の苗木七〇〇本が送られた（小金井桜　五九二）。日本基督教会阿佐ヶ谷教会では、昭和十三年から計画を立て、昭和十五年四月に小金井伝道教会を建設した。小金井にはキリスト教の伝道所があり、一〇年ほど前から、礼拝、子供向けの日曜学校・週間学校、婦人会、母の会などが行われていた（現代　一四・一八）。六月には、小学校で紀元二六〇〇年奉祝銃後奉公祈誓式が挙行された（「学校日誌」）。このように、紀元二六〇〇年を記念・祝賀する雰囲気が地域にただよっていた。個人のレベルでも、八月に記念として神明宮に社号標石を寄進した事例があった。

国家的な奉祝行事は十一月十日に行われた式典であった。平井町長が招待されたほか（平井家　四四一）、十月の銃





後奉公強化運動（精動運動の強化期間）で銃後の「善行者」として表彰された大賀すゑも参加した。彼女は、愛国婦人会・国防婦人会・赤十字社員として、私財を投じて傷痍軍人や応召軍人の遺族家族に対して慰問・指導・激励に努めていたという（昭和十五年十月八日・同年十一月十日付「東京日日新聞」）。

同日は、小金井町でも、尋常高等小学校の校庭で町の紀元二六〇〇年奉祝式典が挙行され、引き続いて町民体育会が行われた。翌十一日も、紀元二六〇〇年奉祝の祝宴がひらかれ、小学校は一時限目だけの授業となった（「学校日誌」）。上山谷では児童の旗行列があり、新調された神輿も出た。夜は提灯行列があった（昭和十五年十一月八日付「東京日日新聞」）。このように、紀元二六〇〇年という国家的イベントは、地域でも祝われ、人びとに楽しまれ、長期化する日中戦争の「ガス抜き」の機能も果たした。

式典後も、青年学校で十年以上勤続した教練科の指導員が府から表彰され、小金井町からも一名が選ばれた（昭和十五年十一月二十八日付「東京日日新聞」）。翌年には、式典で奉祝殿として使われた建物を防空大緑地内に移築し、文部省の国民錬成所の中核的施設として利用することが決まった（現代　二八）。国民錬成所は、学校教員・青年団・勤労団体・思想団体・常会の指導者などを「錬成」し、国家意識を昂揚させることを目的とした施設だった。敷地の整地作業は児童・生徒・学生による勤労奉仕で行い、紀元二六〇〇年の「感激」を後世に伝え、その精神を学ばせることになった（現代　二九）。各地から学生・各種団体や近隣住民が「聖なる汗の奉仕」に参加して移築が完成し、昭和十七年十一月十一日に開設式典がひらかれ「光華殿」と命名された（現代　三三）。

## 戦争と都市化のなかでの対立や摩擦

工業化・都市化のなかにあって、小金井では様々な事件がしばしば発生した。町制施行直前の昭和十二年一月には、横河電機製作所の職工二名が、芝居を見物した帰りに鳶職人一名と自動車運転手二名に棍棒で殴打され重傷を負うという事件が起きている。職工たちが浴場で村の若者を侮蔑するような話をしていたのを聞いて、鳶職人と運転手が憤慨して暴行に至った事件だった（昭和十二年一月二十二日付「東京日日新